

浄土

1977 - 10

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別送達郵便物）第三五号
昭和五十二年九月二十五日印刷 昭和五十二年十月一日發行
第四十三卷 第十号



悠久の花を 咲かそう



好季、秋の到来だ。好天の日中には、丹精した甲斐あって、見事に開いた菊の大輪を觀賞するもよし、茸狩、初紅葉觀賞に、野山に出かけるも結構だ。また、静かな夜中には、燈下の読書と洒落てみたい。酷暑の夏から開放されたいま、何をするにしても、心身ともに爽快な、「天高く馬肥ゆる秋」の言葉どおりの時季である。

しかし、つぎの言葉が出てくる。「女心と秋の空」で、実際には、このシーズンほど天候の変わり方がはげしいことも、またないのである。好天にいななわれ郊外に出かけたものつかの間、にわかには曇天となり、冷たい驟雨にさらされた経験をした方も多いと思う。

武士の命を露とあらそひし

荒野の末に秋風ぞ吹く（石川依平）

この歌ではないが、人の世においても、また同じことがいえる。生きゆくものにとつては、栄枯盛衰は常である。営々と築きあげたものの、一瞬のうちに奈落の底に突き落されてしまうこともある。

だが、ここで挫けてはいけない。弱音を吐くべきではない。「楽あれば苦あり」の反対

も成りたつ。精進努力すれば、かならず報われるものだ。

誰も、己れの人生に目標をたてていると思う。そして、その達成のために、汗水たらして働んでいる。成功したといつては喜び、失敗しては悔やむ。これを繰り返しながら、一步一步目標に近づいていく。

しかし、この目標達成のために、ただがむしゃらに振舞うことは避けたい。人の世は、それほど甘いものではないからだ。得意の絶頂にあるうちは、周囲の眼はやさしいが、失意のどん底にいるものへの眼は厳しい。この両方の眼を、絶えず気にしながらの人生は、なかなか容易なものではない。

だが、この厳しさを克服するために、また人は努力をする。そして、その努力の甲斐あって、自ずと秋陽に輝く菊花の大輪に似た、見事な花を咲かすことになるのだ。

この一度咲いた大輪を枯せてはならない。そのための努力も、また厳しい。しかし、ここで怠けてはなるまい。それを超越したところに悠久の花が咲き、そこにこそ本当の人生があるからだ。

（長谷川宣丈）

十月号



われ、浄土宗をたつる心は
凡夫の、報土に生まるるこ
とを示さんが為なり。

——『勅修御伝』

目次

追悼特集 武田泰淳を憶う

- 泰淳忌に寄せて……………宮 林 昭 彦 ……(2)
- 武田泰淳の思い出——作品をたどりながら……………佐 藤 密 雄 ……(3)
- 未完成の意味
 武田泰淳『快楽』にふれて……………久保田 正 文 ……(7)
- 座談・素顔の武田泰淳……………武 田 由 利 子・佐 藤 治 子 ……(11)
- 武田泰淳略年譜……………(16)

<人生読本コーナー>草花との語らい……………柳 宗 民…………(25)

<ふるさと紀行>

メメンジャコ祭りとお十夜の頃……………中 島 照 然…………(30)

いのちを考える⑦<スポーツ>

- スポーツと健康……………藤 木 宏 清 ……(17)
- 生命の燃焼としてのスポーツ……………水 村 治 男 ……(21)

<随想> 緑蔭法談(二)……………伊 藤 一 義…………(34)

<表紙裏・巻頭言> 悠久の花を咲かそう……………長 谷 川 宣 丈

念仏ひじり三国志④——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉…………(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部

◇ 泰淳忌に寄せて ◇

すべてのものは変化する、変化するものは互いに関係しあつて変化する、よろこびも悲しみも変化の中にある。

武田泰淳先生の人生観の基調として、いつも心の底流にあつたものは、「諸行無常」というもつとも仏教的な思考である。冒頭の武田先生の言葉もそれはただ単に、朝露のはかなさや、淋しい、悲しいという論^{ありき}めの哲学としてではなく、ダイナミックに生きる人間の存在を見究める立場からであつた。武田先生は浄土宗のお寺の次男として生まれ、東大を中退し、増上寺で加行を受け、僧侶として寺の生活をしながら、文学に傾倒し、あるときには左翼運動に身を挺して獄中に繋れるなど、人間のギリギリの体験をしながら、作家として生きぬかれたわけである。

先生は僧侶としてより、作家としての生き方を求められたのではなく、人間の限界状況を追い求めた結果が、文学者という立場であつただけのことで、寧ろ、もつとも仏教的な生き方をされた方のように思えてならない。赤裸な人間の真実を求め、政治や権力に迎合することを嫌い、羞恥心のない偽善者を軽蔑した。

武田先生は「善導大師の六時礼讃はすばらしい。無常偈は心を清め、深くするよ」とよく云われた。そして、「諸行無常の仏教の哲理を、もつともわかりやすく民衆のために説かれた、法然上人はすばらしい人だし、南無阿弥陀仏の信仰はありがたいね」とも語られた言葉がいまだ耳朶に残っている。先生逝かれて、十月五日は早一年を迎える。懐しみをこめて、ここに特集をおくる。

(宮林 昭彦)



武田泰淳の思い出

—— 作品をたどりながら

佐藤 密雄
さとうみつお

(鎌倉大仏殿高徳院貫主
仏教大学教授・文博)

「異形の者」が発表されたのは昭和二十五年のことであるが、書かれている事柄は、昭和八年の暮れ近く、泰



在りし日の武田泰淳

淳君が増上寺で加行を受けた時のことである。いうところの日支事変の初期である。小説の中に出る中国僧密海さんは、当時の国策による日支親善工作の意味もあって、増上寺が招いた中国人留学僧。小説の主人公で、一人称で出て来るのが作者である。入行の時に、彼を「色あくまで黒い大坊主が、残忍なまで白い歯をむき出して私を迎えた」とある。如何にも仇敵に迎えられて、加行に入ったように記され、迎えた僧を悪僧めいて書かれているが、この僧は、当時の増上寺の総監ともいふべき地位にあったK師のこと。K師は往年の万能スポーツマンで、この前年に私や泰淳君等と計画したスキークラブ

に、先輩として迎えられた人、野沢や五色といったスキ―場を共に廻った。この、いささか出歯のK師は、ここに書かれているのとは違って、恐らく、愛情を込めて、この小説の主人公を迎えた筈である。

加行は、浄土宗の僧侶志願者が、学歴と年齢の調った時に行うもので、僧侶となる仕上げの修行である。泰淳君は兄の泰雄君と共に、昭和の初めに、僧籍を得る得度を、知恩院で、百歳の高僧山下現有大僧正に受けている。この山下大僧正に、伯父の渡辺海旭師と同行して、面接する場面も、「異形の者」に出て来る。兄泰雄君は後の東大農学部長であるが、僧侶とはならなかったので加行は受けていない。泰淳君の方は、父の要請で、父の師で明治の傑僧であった武田芳淳師の名跡を嗣ぐこともあって、半ば強いられた形で加行に入ったのである。

「異形の者」は、小説としては加行の総監督K師と四十数人の加行僧とのトラブルを扱っている。K師が規律を乱した行僧を殴打したことから、ストライキめいた事になるが、実際は監督のきびしさへの行僧の反抗に外ならないが、加行という密室的な行法の故もあって、怪しげな本質論をからませた反抗の論理が作り出されてい

く。初めK師を呼び出して殴打してあやまらず案が出るが、これは猫鈴会議となり、同時にK師の地方出張で沙汰止みとなる。どんな集会でも、大勢の動向に乗じて、売名の虚勢的指導者になりたがる者があるが、Aはそれであった。Aは、K師の如き監督では真実の修行は出来ぬから、全員退去すべきだと熱弁を振るが、行僧の中には老年になって僧となろうとするものもあって、退去という修行放棄には賛成出来ないものもある。そこで、小説の主人公は、如何にも彼らしい発想であるがガンジー張りの断食による抵抗を主張する。Aとその一党は初めは冷笑していたが、やがて主人公の主張が勝つことになった。体力を誇示するAは、報復の為に、主人公に、深夜の鐘楼の裏山での決闘を申込むが、彼はこれを受け容れることになる。正伝法という、深夜に行われる最後の儀式のあと、静かな足どりで裏山に向うところで、小説は終る。武田泰淳という人は、誤解であろうと何んであろうと、いいわけは一切せずに、無法な制裁でも、だまって無抵抗に受けた。浦高時代に拘留された時も、そうであったと思わせるものが、この小説の余韻となっている。

泰淳君は東大で、竹内好、岡崎俊夫の兩人と同級であった。竹内さんは、病を押して泰淳君の葬儀委員長をとめて、その後亡くなられた。岡崎さんは、週刊朝日編集長時代に、筆者は知人の就職で厄介になったが、若くして亡くなった。東大時代魯迅の弟の周作人を迎えて、中国研究会を作ったのは、この三人が中心であった。昭和四十二年に「秋風秋雨人を愁殺す」という小説を『展望』に発表したのが、これは昭和九年に、謝永瑩女史が来日した時の事情を扱ったものである。当時の言葉でいう社会主義弾圧時代のこと。泰淳君は、彼女に宿舎を斡旋し、日中両国語の交換教授をなしただけであつたが、女史の身辺を洗っていたその筋に、国際共産党の資金画策者との疑を受け、目黒署に約一カ月半留置された。この時も無抵抗に過した。然しこれは、参画の事実なく釈放されている。

泰淳君は、昭和二十二年に北海道大学の、新設法文学部の助教授となった。父の知人だった北教授の招請によるものである。然し翌年には、これを止めた。「北海道で安定して暮しても、何にもならない。苦しい生活でも、東京の生活は何かになる」とは、直接筆者に語った

言葉である。然し北海道は無意味ではなかった。長編「森と湖のまつり」を産んだ。後年富士山麓で書かれた長編「富士」と相並ぶものである。この外に、北海道産とも言ふべきものに「ひかりごけ」がある。筆者には、何とも無気味な思いをさせる小説である。この小説の前半はひかりごけ探索記で、後半は戯曲になっている。私には、武田文学を象徴的に言えば「ひかりごけ」である。

作者は、如何にも善人らしい校長さんとひかりごけを見に行く。場所は標津の先端。筆者の知人が標津に出来た高校の校長になったので、始めて地図の上で確めたが、知床半島の東側、前面は根室海峡の一部、一番小さい野付牛水道に面したところ。指呼の対岸が有名なソ連占領のクナシリ島である。ここからバスで羅臼という漁村に行き、またそこから、漁船に乗って、コンブ漁場を行くとマツカウシという所がある。岸壁によって内陸と遮断されている。そこにある洞窟が、ひかりごけの生息地。一見湿った洞窟で、内部は一面の苔である。案内の校長さんも初めてのこと、最初のうちは「何もありませんなあ」であつたが、やがて向きを変えると光るものがあり、差し込む光線と見る者の角度によって、全面がひ

かりごけであることが判った。自分の足元、踏みつけた足跡も、足型に無気味に光るのである。そして、校長さんは、この洞窟で人肉喰い事件があったというのである。

作者はこれに続く人肉事件の戯曲を構成するに先立って言う。野上弥生子の「海神丸」の殺人劇では、船員は殺人を犯したが人肉喰いの罪を犯さなかった。大岡昇平の「野火」では、飢えた兵士は、仲間から与えられた日本兵の人肉を、口まで入れるが、ついにのどより下へは吞み下さなかった。この二つを念頭に置くと、更に、このような絶対に食物がなく、必然に餓死が起ることが感ぜられる場合には、以上の外に、三つの場合が起る。(一)殺して人肉を食う、(二)殺すが食べない、(三)自然死(餓死)した人肉を食うという三つの場合が考えられるという。

厳冬、野付牛水道を通った軍用船団の一つが難破した。乗組員の中で船長を含めた四人だけがマツカウシの洞窟前に打ち上げられるようにして着いた。厳冬の海岸には、夏場のコンブ取りの小屋があり、その中の棚の上に残された一個のマツチが焚火の元となって、ともかく彼等を一時的であるが、生かした。然し、波に打ち上げられた一匹の海獣と一羽の鳥との二つの死体がなくなる

と、ほんとうの飢餓地獄が来た。飢えて死んだ仲間の死体を見る三人の、何とも言えない問答が戯曲の第一幕、第二幕は、一人を残って町へ生還した船長の、人肉喰い裁判となっている。

春になって、洞窟で生き残ったのは船長一人、標津の町に現れて歓迎されるが、やがて海岸に流れ着いたミカン箱に骨ばかりの死体があったことから、船長はこの裁判を受けることになったのである。船長は洞窟では悪人の面相であったが、法廷では、かつて作者がひかりごけを探しに出かけた時の、同行の校長のように、おだやかな善人の面相となっていた。烈しい裁判官の詰問には何事も語ろうとはせず、弁護士に対しても「誰だって、私には何もしてくれることは出来ませんよ。洞窟の中でもそうだったし、裁判所の中だってそうですよ」と述べている。この第二幕は、第三者から見ても、奇妙なことばかりという被告の罫りに、法廷の全員が、あたかもゴルゴタのキリストの見物人のように集まったところで終わっている。「誰が裁けるか」と作者が、言いたいのであらうか。ともあれ、武田泰淳とはぎりぎりの極限を求めた作家だった。

未完成の意味

武田泰淳『快樂』にふれて



久保田正文

(大正大学
文学部教授)

○

武田泰淳に未完の小説は多い。未完の小説の多いことを一向に気にかけない、そういうタイプの小説家で、武田泰淳はあったとさえ言うるかもしれぬ。ひとつの作品が未完であるのは、おれの責任ではない。小説が人間・人生そのものを反映するものであるならば、人間・人生そのものが中間的にして完結していかないものであると同様に、あらゆる小説は未完である権利があるのだとで

も言っているようである。「異形の者」の冒頭に、「ある哲学者」との論争が出てくる。人間存在を、地獄と極楽との中間に不安定にただようものとして設定したが、主人公の青年僧の思想のようである。それだから、「異形の者」とは私の極楽物語の一節である。Vとした、この作品の結びは、加行の最終日、深夜十二時のアミダ如来像の前での誓いの儀式のあと、青年僧が荒法師の穴山との決闘に出かけるところで終るのである。

「異形の者」が、はじめに雑誌に発表されたとき、

『展望』昭和二十五年四月号)、〈未完〉としるされていたはずである。そして、その続篇、あるいは姉妹篇の実質をもって「快樂」が、『新潮』昭和三十五年一月号から三十九年十二月号まで、四十五回にわたって連載されたときも完結しなかった。完結しないままに、二巻本として現在新潮社から刊行されている。文学賞もつけた。未完の作品ではあるが、充分によむにたえるどころか、読者としては背負いきれぬほどの大問題をつぎつぎと手渡される。例の、荒法師穴山が、両作品に共通した重要な副人物としてあらわれるところだけからみても、これら二作品の内面的なつながりは明らかである。同時に、はじめほとんど六、七十枚の作品であった「異形の者」のテーマを、十年経って千枚以上の作品に拡大しても、そのテーマを完結させることができなかった。まことに、人間と文学は、ひたすらなる過ぎて往くもの、である。

○

小説作法という点からみれば、「異形の者」は、新進作家の緊張した作品らしくほほ乱れなくととのっている。同時に、第一次戦後派作家らしく、自然主義的リア

リズムの手法に妥協することなく、新しい観念的な思考と技術とを駆使している。そういう方法をさらに熟練した手腕でつかいこなした「快樂」はしかし、自由奔放なわがままを、作者じしんがじぶん許すところまで溢れ出している。ひとを喰ったリアリズムともいべきものが、平気で採用されている。はやいはずだが、この作品ぜんたいの時代設定は、リンチ共産党事件のおこった年(昭和八年)ということになっている。ところがいつの間にか、ヒロインのひとり久美子は、昭和十年代の女性ということになる。ネズミ年(一九二二年)うまれの主人公柳が、昭和八年(一九三三年)に十九歳ということになっているのなども、満年齢計算にしてもおかしい。向島の西方寺での、宝屋の法事のあと、中華料理東芳園での豪華な場面は、古い自然主義作家などでは及びもつかぬほど堂々たるリアリズムで描ききられているが、柳が熱海の豪壮な宝屋別荘に招かれての浴槽のシーンなどはいくらなんでもムリである。十九歳の柳が、妖艶な宝屋夫人と、その妹の清純な久美子とに、浴槽のなかでとりかこまれるのである。しかも、いつのまにか宝屋主人もその別荘に来ていて、彼は屋根にあがって、崖下から迫って

くる火事の見張りをしているのである。どうやら浴場から難なく脱出した柳が、屋根に上って宝屋主人と話しよう場面はまた、かなりよくつくられている。しかし、その翌日、坂下のホテルで穴山が宝屋夫人にサディスティックな暴力をふるうのを、柳が呆然自失して傍観してあと、柳と宝屋夫人とが肉体的な交歓におちいってゆく経過は、心理的には理解しうるにしても、事がらそのものの全体の過ぎゆきとしてはいかにもムリである。終末部分にあらわれるシーンであるが、柳の母が西方寺へあそびに行つて足をくじいて滞在しているのを、父にいわれて柳がむかえにゆく。柳が西方寺に來ていることを、宝屋夫人が知つてやつてくる。本堂へ花をそなえるという口実をつくつて、宝屋夫人が柳をともなつて本堂の奥へ行き、けつきよく二人が抱きあう。あの場面も不自然なら、その直後、地下に潜行した久美子からの電話がきて、久美子がハウス・キーパーをつとめている革命党の青年巨頭宮口らのための、二千元の金を柳が渡す（その金は、宝屋夫人が夫に承諾させて持ち出したものである）。街頭連絡の場面も、あの時代の切迫した雰囲気がかんがえあわせると、いかにも不自然、というよりはデタラメにち

かい。なにしろ、川端のベンチに掛けて、人目に立つ美男と美女とがながながのんびりと、仏教や革命や愛情やについて語りあっているのだから。

これら、人生の現実についても、昭和八、九年ころの歴史の現実についても、一顧も与えないほどの天衣無縫ともいうべき超リアリズムを、作者があえて駆使しないではいられなかったのは何のためであるか？ そのような、瑣末なりアリズムを踏みにしても、あるいは踏みにじることによつてのみ獲得しなくてはならぬ、もっと大きいリアリティが、人間の世界そのもののなかに、あるいはその底、あるいはそれと密接に連続しつつそれを超えようとする意志のなかに存在すると、作者がかんがえたためではないか？ 人間以前、あるいは人間以後を、しかも人間そのものの条件を無視することなく探るためには、現世の、現実の、人間のかりそめのリアリティなどは、どのように無視することも許されるというのが、武田泰淳の創作方法であつたかもしれないのである。

それだから、「快楽」のテーマはこういう派手なざらびやかな話の底に重く沈んでいる。主人公の柳は、目黒

の古い大きい浄土宗の寺の後継者として、大学も途中でやめていま、僧侶として生活している。高校から大学時代に非合法共産党の活動に参加していく度が検挙されたことがある。いまはしかし、仏教徒としての生活にも理論にも安定した確信をもちえないまま、共産主義者としてもアウト・サイダーの位置にとどまるほかないと思っている。ただ彼は、父と従兄の西方寺住職秀雄とを敬愛している。仏教大学の教授であり学部長である父は、世俗的な雑用をきらい、宗団の因襲と現状にも批判をいだし、黙々として読書し、広い境内に畑をつくり、植物をそだてることに孤独なたのしみを発見している。病弱ではあるが秀才の秀雄は、教理についてつねに柳に対する啓発者である。そのようにして、父や秀雄が柳にとつて仏教的な力としてはたらく一方で、宮口を中心とする共産主義の力も依然として彼にかかりをもっている。リンチ共産党事件にそれと意識せずにかかわりをもち、そのために目黒署へ留置されて、結果として宮口の逃亡を助けるという事件の設定は、いかにもつくり話めいているにしろ、仏教と共産主義(社会主義)とを、どこで結びつけ、どこで区別するかという、この作品の中心

テーマのひとつのための必要な理由のあるフィクションとなるわけである。

宝屋夫人とその妹久美子とは、女性的なもの、したがって性の存在が人間にとつても仏教の理論にとつてもいかに大きな存在であるかをかんがえるための乗物である。解放的・挑撥的に柳を求める宝屋夫人と、清純に内面的に柳を慕う久美子とは、性の存在における陽と陰との対蹠を示しつつ、久美子は南伝大藏経をよみふけることに導かれて共産主義との一致点を見出し、柳の半面に共感しつつ宮口のハウス・キーパーとなつてゆく。それだから、結末部分の街頭連絡の場面で、久美子が仏教と社会主義とは統一・調和しようとして柳と議論するくだりがつよい意味をもってくるのである。

○

その他、仏教教理の根本問題であるいくつかのテーマについての思索が、小説の枠をぎりぎりの線まで拡張しつつ織りこまれていく。こういう性質の小説に、結論も完結もありえないとみるの方が、むしろ当然のことと言いうるかもしれないのである。

座談 素顔の武田泰淳



たけ だ ゆ り こ
武 田 百 合 子

さ と う は る こ
佐 藤 治 子

(司会・編集部)

—— 昨年の十月五日(火)に、作家の武田泰淳さんが亡くなられてから、早くも一年になろうとしています。『浄土』誌とのかかわりの深かった武田さんを偲んで、このたび武田泰淳の人間と文学を回顧しながら、本誌でもいささか追悼の特集を組んでみようということになりました。

そこで本日は、武田さんの奥さまの百合子夫人にご足労いただき、また生前の武田さんと非常にご親交の深かった浄土宗寺庭婦人会長の佐藤治子夫人にもご臨席をいただきまして、まあ主として、ご婦人のお立場から「素顔の武田泰淳」といいますか、「人間、武田泰淳」ということにつきまして、お身近な立場からお話しをおうかがいしたいと思います。

武田 あまり仏教的なお話しということでもよいわけですね。私、そちらの方はむずかしくてなかなかわからないもので……。

—— もちろんです。むしろ武田先生の日常的なことどもの、逸話やら、お考えやらをお聞きできれば幸いです。

佐藤 そうですね。フランクな気持ちでお話ししたいわ。百合子さんとの出会いはとても古いんですね。確か、あるご法事の席の後、百合子さんが私どものしてお袈裟をみて、「治子さんがかけていられるようなお袈裟を私もかけたいわ」とおっしゃったんですね。そうしたら泰淳さんが、「ダメだよ、あれは寺庭の奥さんがかけるもんだから。お前にはそ

の資格ないよ」といわれたの。そこで私は、「そんなことないわ、百合子さんのかける在家用のものだってあるのだから」といったことを覚えているの。それというの、何の時でもお経を読む時は、必ず百合子さんはお袈裟をかけていらっしゃるの。それが忘れられないの。それで、泰淳さんのお葬儀の時も、花子ちゃん（武田泰淳氏令嬢）とお二人でちゃんとお袈裟をかけていらしたの。

武田 そうなんです。最初は、治子さんのお袈裟姿をみてかけてみたいと思ったんですね。

佐藤 それから、武田さんご夫婦は『六時礼讃』が非常に好きで、それで何かの時にテープを送ってあげたのね。

武田 武田は人に何かを教えるのがとても苦手なんです。たとえば戦後、北大の先生などもやったんですが、どうも性に合わなくてすぐに東京へ逃げて帰ってきたみたい。それで、色々なこと、仏教のことなどもそうですが、私や花子にも全然教えてくれないんですね。ところが、そうですね……「お経では『六時礼讃』が一番いい。その中でもとくに『日没無常

偈』がいいんだ」と、何回か聞いていましたね。そこで私が「『日没無常偈』ってどういうの」と聞くと、「そんなこと一言では説明できないさ。とにかくいいんだよ。行の時なんか、立ったり、坐ったり礼拝しながら、あらゆる仏さまを讃歎するのが、とってもいいんだよ」としか話してくれないんです。もちろん、読んでもくれないし、どういうお経にあるかも教えてくれません。そこで武田がいるところというと、「わあお前、そんなこと口に出して」なんておこられますから、治子さんにそっとお願ひして、『六時礼讃』のテープをいただいたんです。

佐藤 ただ今は、浄土宗の方では善導大師の千三百年のご遠忌を迎えるということで、色々な行事が企画されたり、行なわれたりしているんですが、とにかく武田さんは善導大師にはとても注目されていたようですね。そして、私が今、『六時礼讃』のお話しを先にいたしましたのは、「ご葬儀の時の礼讃がとてもよかったです」とみなさまからおうかがいしたりしましたので、とくに申したわけなんです。

——確かに、昨年の葬儀はとても印象的で、文壇の方

のお仲間の人々のご弔辞も感銘深いものでしたが、ご参列の方々もあの礼讃の雰囲気とともに、武田泰淳の死ということに心を深く沈めていらしたと思われました。

佐藤 この『六時礼讃』については、百合子さんとのお

話しからか、私の心には非常に残っているんですね。

でも、確かに武田さんというのはたいへん無口で、あまり話されない方でしたね。

武田 そうですね。無駄なことは話さないというか、余計なことはしたくないというか、とにかくよくいわれるように恥ずかしがり屋で、そういうところはぎこちなくらいでしたね。

——そう、これは短い作品なんですが、「父子の情」というのがありますね。それによりますと、お父さまの泰信先生（大島泰信・元宗教大学教授）も、むしろ厳格な父というのではなく、教えたりすることも苦手な人だったということが書いてあるんですね。しかし、思いやりというか、情のこまやかなテレ屋さんであったという風に……。武田先生の人間というものもそのように非常にやさしく、まあそれが武田さ

んのテレに通じたんでしょうが。

佐藤 そう非常に思いやることのできる人だったと思いますわ。いつかある人のことをかばって、「あれでいいんだよ」といわれた言葉を、私は今でも覚えていますわ。

武田 とても恥ずかしがり屋だったんですね。

佐藤 確かに無口で、恥ずかしがり屋で、とりつきにくい方でもあったけど、でも要所要所はちゃんと心得ていらして、そういうところの責任感というのはしっかりと持っていていらしたと思いますわ。

武田 それから武田はいちいちちょっとしたことでも怒ったりすることはなかったんですが、幾分かかんしゃく持ちで、私なんかしかられたり、怒られたこともありました。その時はとてもこわかったわけですが、普段は、ひとを怒ることはきらいだったんでしょね。

佐藤 でも、怒ったりするのはあなただけだったんじゃないでしょうか。

武田 そうかもしれませんね。

佐藤 結婚される前、まだ目黒の長泉院におられた頃、私などがよくうかがいますと、渡辺海旭先生、泰信先

生が「麻雀しよう」なんておっしゃいまして、私たちが遊んでいると、泰淳さんやお兄さんの泰雄さんは、「今日は、いらっしゃい」なんて調子で、あんまりペラペラお話しされたりする方ではなかったですね。それで二階に上って、書きものとかお勉強に入ってしまったわね。でも、百合子さんと結婚されてからは、泰淳さんは女の人の描写が上手になられたんじゃないかしら。それは百合子さんの内助の功なんですよ。

——杉並の天沼にお住まいになって、江の島の方へ移られた頃もありましたか。

武田 腰越に住んでいたことがありますね。私たちは、ご存知のように正式に結婚したんではなかったものですから、あの頃はあまり大っぴらには行動できなかったんですね。その頃でしたか、一度治子さんにご訪問いただいたことがありましたわね。

佐藤 そうでしたわね。そうそれから、私どもの父の葬儀の時でしたか、泰淳さんが香典などの会計をあずかって下さったことがあるの。あまりされつけないことだったかもしれないけれど、大事な時にはちゃんと心

得ていて、きちつとみ守っていられたんじゃないかな。百合子さんのおつき合いのことも、何となく武田さんのみ守っていられる中で、いつの間にかご親交ができてしまいましたの。

武田 私がぼんやりしているから、まったくこまかいことには気づかないし、本当になんとなく治子さんをはじめとして、色々な方々とお知り合いになったようなわけなんです。

佐藤 それから武田さんはともかく派手好きな人ではなかったから。

武田 ともかく武田は公式の肩のこるような席とか、格式ばったことが嫌いで、ともかく自分が自由にくつろいで食べたり、飲んだりすることが一番性に合ったんでしょ。だから、家で私などの作ったものを何でもよく食べました。

——ご家族で旅行なんかもよくされたんですか。

武田 あまりしませんが、取材などでは私の運転でよくかけました。

——日頃のご生活なんかも、大体は規則正しかったんですか。とくに晩年などは……。

武田 脳結栓を昭和四十六年に患ってから、あまり重

くはなかったんですが、それからは無理をしないようにということ、講演とか遠くへでかけるお仕事などは、すべて断っていたようです。朝などは比較的早起きで、テレビなども朝の奥様番組などはよくみていましたし、国会討論はおもしろそうにみていました。でも富士山がやはり一番好きで、富士山の五合目とか、山中湖の別荘などへはよく行きました。

——ところで例の三島由起夫さんのご葬儀の時でしたか、僧形でご参列になり霊前に高声でお念仏を捧げられたことは非常に印象的で有名ですが、あの時には確か法然上人のお歌を詠まれたそうですが……。

佐藤 「つゆのみはここかしこにてきえぬともころはおなじはなのうてなぞ」というお歌でしたね。でもあの時の泰淳さんの態度はすごく激しかったですね。

武田 確かに、あの折は武田はとも興奮していましたね。先程もいいましたように、あまり仏教のことなどを私たちには教えてはくれませんでした。が、法然と親鸞についてはよく知っていましたね。「一般には親鸞聖人の方が広く理解されているようだが、ボクは法然

上人が好きなんだなあ。やっぱり何となく親しみが感じるんだなあ」と申していましたね。

——ああ、それはよいことをおうかがいしました。ともかく増上寺に加行を受けられて、みずからも一寺の住職を名乗られたこともありますし、仏教というか、法然上人の教えがにじみ出てくるものがあるんですね。

佐藤 そうお嬢さんの花子ちゃんも、仏教学を勉強され、今度は五重相伝も受けられたのね。

武田 そうなんです。牧田（諦亮）先生のご自坊の滋賀の念仏寺でいたしたんですよ。それがだれもがいったのではなく、まったく仏縁というんでしょうか、とても不思議なことなんです。

——やあ、それは武田泰淳さんのお心がよく受け継がれていらしているんでしょう。やはりありがたいことですね。話は尽きませんが、今席はこれで閉じさせていただきます。

△なお、武田百合子夫人はこのたび「富士日記」（『海』）により、田村俊子賞を受賞されました。▽

武田泰淳略年譜

明治四十五年（一九一二）

二月十二日、東京本郷潮泉寺で父大島泰信、母つるの次男として生まれる。幼名は覚（さとる）、後に父の師僧であった武田芳淳の後継者として武田姓を継ぐ。

兄は大島泰雄（元東大教授）、妹の真百合は二児の母にして昭和二十年に病没。

大正七年（一九一八） 六歳

本郷誠之小学校へ入学。

大正十三年（一九二四） 十二歳

府立五中などに落ちて京北中学に進む。

昭和三年（一九二八） 十六歳

中学四年修了で浦和高校文科甲類に入学する。中国文学に興味を持つ。

昭和六年（一九三一） 十九歳

東京帝国大学支那文学科へ入学。同級生に竹内好、一年上に岡崎俊夫がいた。この頃、左翼運動でしばしば逮捕される。

昭和八年（一九三三） 二十一歳

周作人の来日を期に、竹内、岡崎、増田渉、松枝茂夫との五名で「中国文学研究会」を作る。

昭和十年（一九三五） 二十二歳

「ユーモア雑誌『論語』について」（『斯文』）等より次第に中国文学関係の批評文を発表する。研究会機関誌『中国文学』を創刊する。

昭和十六年（一九四一） 二十九歳

日本出版協会海外課に就職。

昭和十八年（一九四三） 三十一歳

『司馬遷』（東洋思想叢書）刊行。

昭和十九年（一九四四） 三十二歳

山本健吉の紹介で『批評』同人となり、河上徹太郎、中村光夫、吉田健一等を知る。この年、上海に渡り中日文化協会に就職し、石上玄一郎、堀田善衛と会う。

昭和二十一年（一九四六） 三十四歳

日本に引き揚げる。「才子佳人」（人間）発表。

昭和二十二年（一九四七） 三十五歳

北海道大学法文学部助教授となるが、半年で辞す。『鯉のすえ』刊行。

昭和二十三年（一九四八） 三十六歳

『近代文学』同人、塩谷雄高、平野謙、荒正人等を知る。また椎名麟三、野間宏、中村真一郎、三島由起夫等の『序曲』の同人ともなる。

昭和二十六年（一九五二） 三十九歳

鈴木百合子と結婚。長女花も誕生する。

昭和二十七年（一九五二） 昭和三十四年（一九五九） 四十歳—四十七歳

『風媒花』（昭27）、『流人島にて』（昭28）、『人間・文学・歴史』（昭29）、『火の接吻』（昭30）、『女の宿』（昭31）、『みる・きく・かんがえる』（昭32）、『森と湖のまつり』（昭33）、『貴族の階段』（昭34）等を刊行。

昭和三十五年（一九六〇） 一昭和五十年（一九七五） 四十八歳—六十三歳

東京渋谷赤坂に転居する。『政治家の文章』（昭35）、『花と花輪』（昭36）、『十三妹』（昭41）、『富士』（昭44）、『快楽』（昭47）等を刊行。

昭和五十一年（一九七六） 六十四歳
十月五日永眠する。

いのちを考える

(七)

— スポーツ —

スポーツと健康



藤 木 宏 清
ふじ き こう せい

(日本体育協会評議員
日本カヌー協会副会長)

「健康が人生の総てではない。然し総ては健康

が無ければ始まらない」。此の言葉は西ドイツで一九六〇年から十五年間で六千億円を投じて、スポーツ施設の建設とスポーツクラブの育成を進める運動——黄金計画——の合言葉であると聞いております。常日頃我々は日常生活の中で健康に就て話題にする割には、無知であり無関心ではないのでしょうか。広い意味での健康は智、徳、体を含めたたくましさですが、普通には体力の健全維

持をさしているようです。

体力には、行動体力と防衛体力があります。行動体力とは積極的に外に働きかける能力であって、筋力、敏捷性、持久力をいい、精神的な意志や意欲も含んでいます。防衛体力は外からの種々のストレスに対して適応していく能力をいいます。しからば、体力が十分に具わっていれば健康であるかと言うと、そうではありません。体力は基準によって測定することが出来ますが、健康は身

体的、精神的、環境的等の色々の要素によって各人が、どうとらえるか、どう感じるかで違ってくるものです。然し日常の活動を積極的に行う為には、絶対に体力的な自信がないと、健康であると言ふ自覚は生れて来ません。

健康である、又健康と感じる基本になる体力は、どの様にして得られるかと言うと、我々が動物である以上、身体を動かす事によって、一応は達成出来ますが、最近の様に省力化が進み、力仕事は機械にさせ、歩行は種々の交通機関を利用し、一方では生活が豊かになった影響で栄養は十分過ぎる程とり、頭脳ばかりを働かしていたのは、決してよい結果にならない事は明白です。

科学技術と工業の発達による明治以降の百年は、それ以前の千年にも匹敵する社会変貌をとげ、ある意味では我々の先祖が夢みていた物質的には豊かな社会が今日であるともいえます。最近の世論調査では生活に就て中流（勿論この中で上中下はあります）であると感ずる人が九十パーセントを超え、残りの十パーセント弱が、上流と思ひ、

貧しいと思うと統計されています。世界のどの国をみても九十パーセント以上の人々が中流生活者と意識出来る国は無いと思います。然しその代償も大変なもので、物質経済が総てを制し、精神面、教育面はお題目だけになり、人々は何時の間にか動物である事を忘れ、人間である事すらも実感として出てこない様な状態です。家庭は、マイホームと恰好よく呼ばれています、社会や自然から疎外された「寝る」「食べる」「子供を造る」場になりつつあります。社会は人工的環境と化し、都市の増大と建造物の増加で自然は無くなり、ひと昔前まで各所にあった空地、原っぱは皆無にひとしく、道路だけが身体を自由に動かせるわずかな場所として残っているにすぎません。

この様な社会は健康にとつての危機と言うべきでしょう。五、六年前から国会の中で結論の出ない大きな問題で「三K」といわれているものがあります。すなわち米・国鉄・健保の値上げに関するものです。米、国鉄の問題は別として健保に就ては健康に重大な関係がありますが、これは健

康維持の中の医療費に関するもので昭和三十年度からみると二十倍にもなり、一日の国民全部の負担額は二億円の割にもなり、ずい分高価な健康を金で買う時代になって来ました。しかも運動不足による成人病が大変多いそうで、男子四十五歳、女子三十九歳前後をガツクリ年齢と言ひ、急激に体力低下の現象が出て来ます。又近年は、世界でも例のない伸び盛りの十六、七歳の少年の体力落ちこみ現象があり、体格では昔より向上しているのに、体力では欧米の半分にしか達しない状況です。肥満児、神経症（精神病）も増えています。が、政治や行政は中々腰を上げようとしません。マスコミも単発的には取り上げますが、社会運動に発展さすまでに至りません。人間の生命の問題でありながら、案外無関心で暮しているようです。冒頭に取り上げた西ドイツの黄金計画に就て多少説明しますと、我が国と同じく敗戦のどん底から奇跡の復興をし、今日の繁栄を築き上げた西ドイツは一九六〇年（昭和三十五年）、既に国民の健康と体力増進のために、自由時間の活用をはかり、

スポーツ及びレクリエーションの施設を建設、自発的な身体活動のクラブを育成し、「第二の道」と称して対処しており、記録と勝利を目指し、特別なトレーニングに励み、人間の限界に挑む高い水準の競技者たちのスポーツが「第一の道」とすれば、これに対して一般の人びとの自由時間を、より豊かに、より健康と体力増進に役立たせるスポーツ活動を「第二の道」と名づけて、幼年から老年までの国民に、それぞれに適したプログラムを提供して来ており、大いに成果を上げています。我が国でも最近、「トリム運動」が行われて来ましたが、これも第二の道運動を一部模倣したにすぎませんが、健康に就て関心が多少でも高まったと言えましょう。

体育・スポーツとよく並べて使われますが、体育は理性の考え出されたもので、学校体育や体操などを指し、体力の向上の為の適切な運動をいいます。スポーツの方は感情の所産であり、楽しくなければなりません。その為の話し合いや、励まし、チームワークが必要になり、お互い決めたル

ールを尊重し、マナーを守り、自ら進んで行うものです。本当のスポーツは、他人から強制されてするものではありません。勝負に一喜一憂し、トレーニングで忍耐を重ね、努力をし、チームに献身することも、すべて自発的でなければならぬと思います。その結果として自分自身の肉体的、精神的な向上、又社会教育的な高まりが自然に生れて来るものです。欧米のスポーツ先進国では、長い歴史の中で徐々に育って来た各種のスポーツが、我が国に近年伝えられたときは完成された形で入り、これを日本人的な潔癖さでルールにのみしばられ、時おり学校の運動部などでみられる「しごき」のスポーツになってしまい、本質を見失ってしまう事さえあります。

ついで、三十年前までは、スポーツはぜい沢な遊びと思われ、一般の人は見向きもしませんでした。近頃は、そうでもありませんが、やはりスポーツを見るのは好きだが、自分でやるのは苦手と言う人が多いようです。中年過ぎて急にゴルフをやる腰痛が起き、マラソンをやる膝やアキレ

ス筋をいためる事故をよく聞きます。体力をつけ健康を保つために行うスポーツも、科学的な智識を持ち、又よい指導者に就かないと、かえって身体をこわしてしまいます。

我が国古来の武道や、宗教的な行は、一般的に言われるスポーツとは違い、ある目的をもって身体を鍛えて行くものですが、体力が向上することは同じです。「修行とは日々くりかえし実践していく中で身につけていくもの」と言われていますが、これが本当のトレーニングだと言えます。山岳宗教の修験者の遭難は少く、礼拝を行う老僧で腰の曲った人も少く、武芸者もまた然りで、身体活動の実践が体力をつけ健康にむすびつくことは間違いありません。食生活の面でも昔から伝わる各修行別の献立では、現代科学の研究結果と一致します。目まぐるしい社会環境の変化と人間性を失いがちな疎外状況の中で、人生にとって一番大切な健康を、我々はつい忘れがちになります。そして少しでも不調を感じると、自らの考えも努力もなしに臨床医の世話になる、然し医者と薬だ

けでは解決出来ないものが多々あります。

「生きること」「生かされること」は精神的にも、肉体的にも、たくましくでなければならぬと思います。我々が人間である以上昔も今も健康

生命の燃焼としての

スポーツ



みずむら はるお
水村 治男

(富士短期大学助教授
同卓球部総監督)

一九七一年、第三十一回世界卓球選手権大会(愛知県体育館)には、五十三カ国の精鋭が参加した。私も日本チームのコーチとして参加の栄を得ることができた。この大会は、特に六年ぶりに卓球王国、中国選手の参加があったので、卓球人ばかりではなく一般の人々にも興味のある大会であった。

期待と緊張の中で、各国選手の入場行進が始ま

を願う気持ちは同じです。先哲の尊い教訓を生かして、生命ある限りたくましく生きようではありませんか。スポーツは、よき指導者に恵まれれば健康に生きる為の大きな助けになります。

り、最後尾は、日本選手団の入場である。開会式での全ての選手の表情は、何か冷いほどに緊張していた。世界卓球連盟エバンス大会長は、重苦しいこの雰囲気の中で次のような挨拶をのべた。「スポーツの中にも政治が介入し、もめごとが沢山ある。卓球界もその例外とはいえない。しかし、この体育館は、そして、すべてのコートは、選手が技を競うためにのみある。そして、このスタンド

は、観衆が声援と拍手を送るためにのみある。」スポーツも人間の社会の中で行われる。スポーツが社会の影響を全く受けないということはありえない。しかし、スポーツの場が社会から独立しているところに独自の意味があるということも重要である。エバンス会長の挨拶はその点を訴えて印象的であった。

スポーツには、他の何ものも犯すことのできない絶対的な「ルール」がある。スポーツの場を成立させるものはルールである。全てのスポーツは、ルールを認めあうことによって成立っているのである。ルールを認め合うところに共通の場が成立する。ここで、はじめて相手を得て、自らの生命を燃焼させることができる条件が形成される。自分が生きるために共に勝利を競い合う相手を認めるという点にスポーツの場の意義があると見えるのではないか。

我々が日常生活をしている時間とスポーツの時間とは、まったく質を異にする面がある。日常生活は「実」であるのに対し、スポーツは仮に

くられたもので、「実」に対して極言すれば、「虚」と考えることができる。スポーツは実人生の枠から一応はずれたところに作られた虚構なのである。スポーツは実人生の枠の中に仮に設定されたものであり、実人生のそれとは異ったそのスポーツ個々の時間や空間の中で行われるもので、それが終了したならば、そのゲームを解消してしまえるのである。スポーツの場は、実人生の上にあえてつくられた虚構なのだから、取りはずすことが可能である。しかし、あえてつくられた虚構の場だからこそ、競技者はストリートに全力を出しきり生命を燃焼できるということが出来る。

スポーツは、日常生活と異り選手の極限を追い求めるもので、妥協や遠慮などの介入は許されない。スポーツの本質がその競技を通じて技を競うことにあるからである。勝とうという意識がなければ、技の競い合いも成立するはずがない。それでは少しの努力も鍛錬も必要でないことになるからである。

スポーツの魅力は、競技者すべてが対等である

というところにある。結果が簡明に表わされ、実力どおりに結着がはっきりとつくところにある。

世の中の勝ち負けが、ともすると実力より他の面、すなわち、コネやヒキに左右される場合があるのに比べて、すっきり割り切れているのである。いいかえれば、実人生は実力と他の要素が入り混っているのに対し、スポーツの場合は実力だけの世界なのである。それ故に競技者は対等の立場で、いわば裸で相手とぶつかり合うことができる。実力どおりに相手とぶつかって敗者となってもそこには恨みなどは発生しないであらう。言いわけは通用しないわけである。勝利が欲しければその道での努力が要求されるだけである。そういう意味でスポーツは割り切れた世界である。

そして、更に、再出発が可能ということもスポーツの魅力である。多くのスポーツ選手は、試合を一つの目標として日頃、練習に励んでいる。そして、いずれ試合のチャンスにめぐり合うはずである。このチャンスで全力を投入するのは当然であるが、ここに必ず「勝者」と「敗者」とが生み

だされる。これは試合という形式から生じる必然の理であり、避け得ないところのものである。誰でも好んで「敗者」とならんとする人はいない。しかし、好むと好まざることによらず、両者のどちらかとなる。しかし、たとえ後者になったとしても次の機会に備えることができるのである。敗者になっても実質的なハンディが加わらず、次の試合にのぞむことができる。

そして、スポーツのもう一つの魅力は、競技者は、与えられた場において、あえてバカになることが許されるということにある。選手が大きな声をはりあげたり、思いきって走りまわったり、時には泥まみれになって全力を尽している姿がそれである。普段大声をあげたりすることは、常識的におさえられているわけであるが、競技場で大声を出すことは別に恥かしいことではない。闘志をむき出しにして相手とぶつかることが認められているのが競技の場である。人間に闘争本能があるのだとすれば、この本能をルールにのっとって満足させるということは、たいへん合理的なことだ

と思う。そして、単に本能を満足させるだけではなく、勝負の中に学ぶものがあり、明日にそなえることができる。

スポーツでは自分勝手に後退することは許されない。ゲームの中では幸福、みじめさ、よろこび、落胆が全て背中合せに存在している。時にはヒーローに、時には敗者になるかも知れないが自分のベストを尽すことのみが許されていることも確かなのである。全力をつくした上で、競技のすべての経過とその結果をまともにうけとめた時に、明日への新しい出発が準備されるのである。

スポーツは人生のすべてではない。しかし、それが人間社会のある部分を占め、さらに、スポーツが人間のあり方に係わる意識は高いものがあるということも認めなければならない。スポーツは、人間生命にエネルギーに方向づけをし、合理的に構成する一つの方法である。それは、勝つことを目標としてかかげることによって不断の努力、精進をうながす。さらに、競技場では、ルールに従って勝負を争うことで、自分の持っている

ものを全部表現する機会が与えられる。自分の獲得したものをすべてはきだすということは、実人生ではなかなか実現しかねることであり、それゆえに、自発的に力をだしきる場として、スポーツには特別な意味があることになるし、我々は立派な勝負を見た時に感動をおぼえる。我々はスポーツから実人生を生きぬくための励ましを得る場合もあるのである。

スポーツが、他の何ものよりも秀れているというわけではなく、スポーツの英雄が他の仕事をしている人よりも秀れているというわけではない。したがって、スポーツを極端にもちあげなければならぬ理由は全くない。しかし、だからといってそれを卑下したり、いいかげんに扱ったりする必要もない。大切なことは、スポーツを人間の生活全体の中に正しく位置づけることである。スポーツの場は実人生とは一応別個の場であることを確認しながら、しかも人間の一つの行為としてスポーツを評価し、これを人間の生活を豊かにする方向で考えていくことが大切なのだと考えている。



草花との語らい

やなぎ
柳むね たみ
宗 民
(園芸家)

(一)

私が花と一緒に暮すようになってから、もう四分の一世紀というくらいで、かなりの年数がたってきたわけです。今では花なくしてはとも生きてはいけない、というような状態ですが、よく私は色々な方々からこういうことを聞かれます。「お前は、お父さんが民芸の研究家で、お母さんが声楽家なのに、どうして畑違いの“花”を本業にしてるんだ」と。そこで私が答えるには、「父

がやっているのは民芸の研究で、やはり美ということにつながるし、母のやっている声楽もいふなれば美につながることで、花作りということも美しいということが主題ですから、美という点では同じなんじゃないですか」という風に話すわけです。そのほかにも、花作りをするようになった動機を尋ねられることがあります、考えてみますと私にはそうしたキッカケというものは思い当たらない。いつのまにか、花作りを自分の本業としていたというようなわけなんです。

しかし私は小さい頃から自然によく親しんでいたことは確かです。本能的というか、遺伝的というか、生まれつきのことのようにでした。私の母はもう八十五歳ですがたいへんな花好きで、歌を歌うかたわら暇があれば庭へ出て花いじり、草いじりをするといった具合でした。戦争中などは野菜作りに精を出し、私は末っ子だったものですから、いつも母にくっついて回っていたわけで、そんなことがなんとはなしに私の現在をもたらししているように思えるんです。母の影響が、私にとってはとても大きかったわけです。

私は戦中はある県の農業試験場で「花よりだんご」ということで、さつま芋作りに専念していたのですが、その後戦後になって、東京に帰って来て、ある庭園にアルバイトに出かけたわけです。この造園にはアメリカからたくさんの花の種が届けられて、今でも覚えていますが、五十種以上もの花の種を私は作りはじめたわけでした。そこではあまたの美しい花々が咲き誇り、毎日毎日驚きの連続でした。それが結局、私が花作りをする基になったということもありましょう。

そして私は夢中になって花作りに励んだわけですが、

その中でも私のもっとも気に入ったのはパンジーの花でした。パンジーというと、紫と黄と青といわゆる「三色すみれ」というイメージが強かったのですが、その時に私が作った花は、幾種類もの改良種で実に色々な色彩がありました。中でもビックリしたのはオレンジ色のパンジーでした。また真ッ赤なパンジーもありました。このパンジーの花を見ているうちに、私も品種改良をやってみようという気持ちになったのです。そこで私は、遺伝と育種学の勉強を数年間に及んではじめたわけです。

私はある年、たくさんの改良されたパンジーの花々を眺めながら非常にもしろいことに気がついたのです。野性のパンジーは直径一センチ五ミリぐらいの小さいものですが、今日改良されたものの中には直径一〇センチぐらいのものまであります。それは一輪一輪の花を次第に選び取っていった結果として、このような大輪を作れるようになったものでしたが、ある時この一輪ごとの違いに気づいたのです。どういふことかといいますと、いつも花の側に近づいていれば近視眼的に花をよりすぐっていたのですが、この時はなんとはなしに遠くから眺めたのです。そこで気づいたことは、そもそもパンジーは

花壇用の草花であったことでした。つまり一度にたくさん咲いたパンジーを遠くから眺めた美しさに、ハタと思いついたたのでした。パンジーの草花としてのいのちというところに、私の気持ちが思い回ったというわけだったのです。

花の改良を進めて行く過程で、「一歩さがってものを見る」というか、いわば遠視眼的な観察法が私にも備わったといえるのです。このように、基本的な視点を大きく転換できたことがとても大切であったと思われるわけです。

(二)

私の花作りは、お話ししたようにパンジーという花をもつてはじまったといっても過言ではありません。今でもパンジーを作りながら、パンジーと一緒に過しているのです。このパンジーという花は、実際に自分が育ててみると、なかなか一すじ縄ではいきません。春先に花の咲いている株を花屋さんから買ってきて植えれば簡単ですが、種からまいて育ててみると、まず芽が出ない、出たものが枯れてしまう、なかなか苗が作れない。私もバ

ンジーを育ててみて、色々なことを勉強しました。

植物を育てることにまず考えなければならないことは、地球上のどこかで自然に育っていた園芸植物が最初はどのようなところで生育していたのか、ということを知ることが大切です。パンジーの場合でも、ヨーロッパの北部から中部にかけて、今でもたくさんさんの野生のものがはえています。いわゆるヨーロッパの野原、原野というところに生育していた植物であったわけです。ということは、ヨーロッパのように夏涼しいところの植物ですから、暑さに非常に弱い植物です。それから原野の植物ということですから、一日中よく日の当るところに生育するものであることが知られます。このようにパンジーは、夏の温度とか、日当たりということに、とくに注意しなければならぬことが理解されます。

私はパンジーを作りながら、またほかの色々な植物を作ってみて、一番大事なことは、この植物の故郷がどこであったか、そしてそこはどんな環境のところであったかということを知ることだと思ふのです。実は、これを覚えるまでに私は多分十年近くの歳月を費しているはずで、草花作りひとつをとってみても、自分で実際にや

つてみるということがいかに重要であるかを、改めて強く認識したわけです。

また花作りには、「愛情をもって望め」ともよくいわれますが、私はまことにその通りだと思っています。けれども「愛情のはき違い」というようなこともあるわけで、なんでも朝から晩まで水をやり、肥しをたくさん与え、どんな植物でも日を当てる、というようなやみくもな愛情の押し売りではいけません。植物を育てることににおいても厳しくするところは厳しくするというような、あたかも私たち人間の成長の場、生活の場にも比せられるように、私たち人間と非常によく似ているということに気がつくわけです。人間と同じように、「必要な時に必要量を与える」というようなひとつひとつの暖かい配慮が求められるわけです。草花を育てる上にも、生き物であるということ忘れないで、人間同士に取り交わされる愛情と同じようなまごころをもって接しなければ、やはり花作り、園芸ということはできないわけです。作れば作るほど植物は生きていくということなんです。

(三)

私はパンジーによつて花作りにめざめたんですが、花の中ではまたバラの花が好きです。バラは世界中の人から愛されています。このバラの花の美しさは、花の咲いた折のあでやかな色、整った形、などとてもよくいわれますが、私は、蕾から花が開いて行く時、この時にこそバラの美しさが示されているように思うんです。朝起きてバラの蕾を見ると、昨日咲くだろうと思っていたその蕾はキレイに花咲きかけています。だんだん、だんだん蕾からほころびて、花は伸びながら開いて行くんですね。その時に、「花は生きているんだなあ」とつくづく思えるんですね。バラというのはおもしろいことに、開ききってしまふとその本当の美しさを失うことが多いわけなんです。開き出している時、半開きの時、その生きているということがわかる動いている時——これがやはりバラの花の本当の美しさだと私は思うのです。

それぞれの花に一番美しい時、一番の見頃というものがあるのです。桜の花でも満開の時よりも、七分咲きの頃が、いわゆる余韻を残した美しさを漂わせています。そうして桜の花のもうひとつの美しさは、いわゆる散り際にあります。ハラハラと花吹雪として散って行く有様

は、桜ならではものではありません。それぞれの花に、それぞれの特徴があるわけなんです。朝顔の花は、朝早く露を受けている時の美しさはなんともいえません。けれどもある人が「私は、朝顔の花というのは開いた時もキレイだ」と思うが、夕方しぼんで、その花がまさに枯れ落ちんとする透きとおったような姿、これがまた非常にキレイなんだ」といわれました。普通ならば、しおれている花なんかは美しいとは思わないでしょうが、こういうところにも生きているものの終りの時の美しさが潜んでいるのです。

花が開く時からしぼむ時までの変化は、確かに生きているものもつ根本的ないのちの流れであるわけです。そのことを皆さまが改めて思い見ていただくならば、私たち花作りをしているものは、まことにうれしい次第です。また、そういう美しさの中から、生命の躍動というものを是非とも汲み取っていただきたいわけです。

ところが花の楽しみ方というものをみてみますと、たとえば外国では外から見た美しい庭、わが国日本では内から見た美しい庭、というようなことが指摘できるようになるんです。色々な気候風土とか、国民性にもよっ

て、かなりの相違が生じてくるわけでもありませんが、しかし最近庭のないアパートや出窓などをお持ちの方が、キレイに鉢植えや蔓草などで飾っておられます。そういう気風が次第に盛んになって、それぞれの家庭の中だけでなく、街全体が明るく美しい草花で荘厳されるならば、それは私たち園芸家のもっとも願望していることでもあります。私が家庭園芸をこうして続けてきたのは、母の側で見よう見まねではじめたことから出発していたのです。その母の教えもまた、花というものは自分ひとりで楽しむのではなく、みんなで一緒に楽しむものだということでした。

今回掲載させていただいた「草花との語り」は、園芸家の柳宗民さんのお話です。柳さんは、有名な民族学者で民芸研究家の柳宗悦氏を父とし、また声楽家の柳兼子さんを母とされ、その暖かいご家庭の中から「草花」をこよなくとしむ心を授けられ、今日すぐれた花作りを实践されておられます。このお話は、九月八日（木）から十日（土）にかけて放送されたものです。

ふるさと紀行

メメンジャコ祭り

とお十夜の頃



なか じま しょう ねん
中 島 然

(福井県丸岡町白道寺住職)

○編集子から風物詩的なふるさとの紀行文をとの執筆依頼をうけた。ここでも軽はずみの性格をちよつびりのぞかせて、ろくろく後先きも考えずにいとも簡単に『何が書けるかわかりませんが書いてみることにします』と至って無責任な返事をしてしまった自分であった。『後悔は先きにたたず』と云うが全くその通りで、いざ筆を執ってみるとその言葉が実感として自分を苦しめはじめた。さりとて一度『書いて見ます』と約束を口外した以上、責任を果すべく思いきって筆を染めてみたのが次のような拙い一文なのである。

○昔から北国きたぐにの冬は足早やに訪れると云われている。私の息づいている丸岡もご多聞たぶんにもれず、秋は駈足であつという間に終りを告げて目の前を通り過ぎてしまふ。残暑が終り、秋の彼岸がすむと、町のやや東寄りの小高い丘に聳える霞ヶ城の桜並木も紅葉への化粧更えをはじめ。この頃になるとふるさとの神社では、豊年を祝う秋祭り、寺々では仏祖に報恩感謝を捧げる法要(十夜会や報恩講などが盛んに勤修されて、法縁を結んだ人達の心に生ける喜びの泉を涵みこませてやまないのである。



丸岡町・霞ヶ城

○ふるさとの丸岡の秋祭りは、昔から誰云うともなく云い伝えている『メメンジャコ祭り』の異名がある国神社の秋祭りが代表的なものである。『メメンジャコ』とはメダカのような小さな魚という意味らしいこの地方の方言である。その名の起りは定かではないが云い伝えによるところである。昔ある年の夏のことであった。草木は枯死し、沼や田の魚までが餓死寸前になる程のひどい日照りが続いたという。村人達の雨乞いは毎日続けられたが一向に効頭

は表れず、依然として天気は続き雨は一滴も降らなかった。そんな時どこからともなく旅の僧が村を訪れた。村人の苦るしみを見るに忍びず、精進斎齋をして雨乞いの祈

願をされたところ、神仏もその真心に感じ給うたのか、一天にわかにかき曇り、慈雨沛然と大地を潤し、今や死寸前の一切の生物が蘇生したということである。この時村人達は云うに及ばず『メメンジャコ』までが感喜雀躍おくとことを知らず、その喜びと感謝の気持ちを表したのが『メメンジャコ祭り』のそもその起りだということである。今でもこの祭りにはよく雨が降るが、これもそのせいだと古老達はさも物知り顔で定かでない云い伝えを誇らしげに語るのである。

○祭りは十五、六、七の三日間執行される。昭和二十三年の福井大地震後街並みも変り、道幅も倍近く広くなつたが、それでも祭りの時は神社周辺の道路は露天商で埋り、交通は遮断されて自転車さえ通してもらえなくなってしまう。十六日が本祭りだが、この日の夜等は参詣人の人波で歩いていても押され押されて一人一人の意志等は無視されてしまうのである。いつもなら露天商の前をうろつく子供達も、この時だけは親に手を引かれないことには迷子になる程の賑いを呈し、さわめきは夜半まで続くのである。

○祭りには昔から植木の市がたつ。『植木まつり』の名があるのもそのゆえんかも知れない。祭りの一週間程前になるとトラックで植木、果樹の苗木、盆栽等がどんどんと運びこまれてくる。運ばれた植木は川を隔てて神社の横にある二ヶ寺の境内に所狭しと展示される。祭りの間は昼夜の別なく礼拝を終えた大人達は（中には植木だけを見る人もあるが）、恰も物怪につかれたように植木市に流れこんでいくのである。正札付きの植木も交渉のいかんによっては半値以下にまけることもざらである。これが又まけさせた者にとってはええも云えない満足感となつてひろがり、来年の祭りも又というような気持ちとなつて心のどこに残るのかも知れない。植木市は祭りがすんで四〜五日位迄は開かれているが、知らぬ間に寺の境内から姿を消してしまうのである。『子供は玩具・大人は植木』こんな合言葉が通用してもよさそうな祭りの光景の一コマである。

祭りには昔は大名行列等も練り歩いたというが、それも今は見られないのが残念なことである。

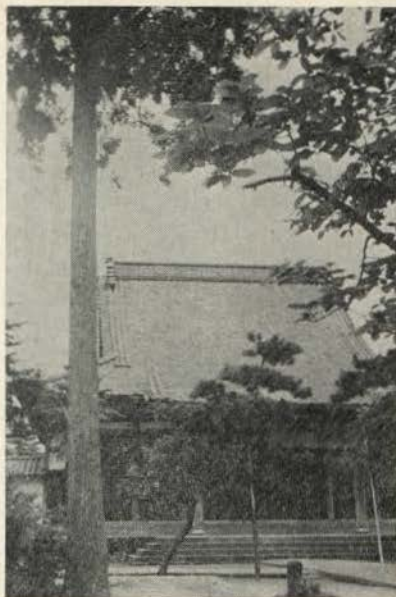
○かくて『メメンジャコ祭り』がすむ頃になると、紅葉した枯葉が地上に舞い、町内の二十カ寺近い寺々では、一年を無事に生かさせて頂いた感謝報恩の法要（十夜会、報恩講などがにぎにぎしく勤修されるようになる）。

法要の日程はさすがにこの地方が昔から、『北陸門徒』の名で呼ばれているように、十カ寺余りの浄土真宗の寺院では三日間勤修されているが、本宗始め他の禅宗、日蓮宗、天台、真言宗等の余宗寺院は一日のみで終ることにしている。なおその一日も午前ぬきの午後と夜間の変則的な一日である。

○法要にはこの地方では『お斎供養』がつきものである。内容は野菜を主とした精進料理で前々日位から用意される。整えられる品々は寺によっては多少の相違はあるが大体よく似たものである。参考のために一例を挙げてみることにしよう。先ずお平には大根、里芋、人蔘、椎茸の煮え、つぼには小豆の甘煮（上に小さな里芋をのせる）それに小皿の一つ一つに、牛蒡のきんぴら、大豆の煮豆、糸こんにゃくの豆腐あえ、ズイキの酢のもの等を盛りつける。それにみそ汁と漬ものがつくのである。中

でもみそ汁の中に打豆といって大豆を平らたくつぶしたのを入れるが、これが又中々乙な味がして忘れがたいものである。

当日法要に参った人達は本堂での法悦の後庫裡でお斎供養にあづかるのであるが、ここではお互いの口を通して天地、神仏の限らない恩徳を味得するのである。お斎こそ人をして仏に近かづける唯一の手だてとも云いうるのではなからうか。寺によっては三宝物を供養されるところもあるがそれも結構なことである。準備の苦勞もさ



白道寺本堂

ることながらこのよき慣習はいつ迄も残したいものの一つである。

○祭りや、法要にかかせない風物詩の一つに露天商がある。『メメンジャコ祭り』には今もなお数えきれない程の露天商が立ち並ぶが、寺々の法要には最近ほとんどこれが見られなくなってしまった。それというのもこれだけが原因ではないだろうとは思うが、この頃は寺で勤修される法要の月日が寺の都合で一定しておらず、毎年変るといふことである。昔は定例であつたために露天商としても日程の計画が容易に組まれたが、現在ではそれが出来ないといふことで、自然と法要に色を添えていた風物詩の一つが姿を消してしまったのかも知れない。何とも淋しい限りである。ここにも時代の推移する影がかい間見られて、大正から昭和を生きて来た者にとってはまことに感無量なものを覚える。

かくして北国は冬を迎えるのである。

合掌

想

随

緑蔭法談(二)

伊藤義
藤一
義

○家一つ畑一枚冬日和

これは小林一茶の句である。田は獲り入れもすみ、作ってあった野菜も出荷して、黒々と地肌をあらわしたわづかの畑と、小さな草葺の家がボツンと見える。ノンビリとした田園風景である。雀が二、三羽落ち、穂を拾っている。冬をすぎた、風の吹かないいうす陽のさす暖かい日和で、一枚の蓆を敷いて、老夫婦らしい二人が日向ボツコをしている。二人か三人の子供もあったが、娘はすでに良縁があつて嫁ぎ、孫の一人も生まれているであろ

うし、男の子は希望に燃えて都会に出て働き、年老いた老夫婦は空気の清らかな交通地獄もない恵まれた環境に、心静かに平和な日送りをするという誠に羨ましさを感じる二人である。

昔は耕作に専念したが、その頃の苦労は察してもあまりあり、農作物はお天気次第とて、日照りや洪水に落胆したり、台風に作物の不良を嘆いたことも、たびたびあったし、不作であれ豊作であれ、生産者米価の変動に気をもむこともしばしばあったことだろう。そして、労働力を補うために購入した機械の支払が頭痛の種であったが、今はお先祖から受けついだ田畑も、それぞれ子供や分家に与え、残っているのはタッタ一枚の畑と、雨露を凌ぐに足る家一つだけである。いろいろの苦労は昔ばなしで、安穩な毎日、朝に星を頂いて野良に出て、夕には星明りに帰るこの老人は、レジャーも週休二日制にも、「何のかわりもございません」と一枚だけ残した畑で、日々の暮しに不自由のないよう、自給自足とでも申しますか、足腰の達者なうちは、働かねばと悠々自適、「身に病な

く、心に悩みなく「静かな、羨やましい老夫婦と、この句を通じて感じた次第である。

○厭離穢土 欣求浄土

徳川家康は、六歳から東海道での覇者、今川義元に人質として預けられたが、成人して十九歳の時に、今川勢の一武将として、田楽狭間の戦いに奮戦したが、織田勢の奇襲に破れ、総師の今川義元も戦死した。

近臣数名を共にして、織田勢の追討から辛うじて免れて岡崎に逃げ帰った。そして将来を儚んで徳川家の代々の菩提寺である大樹寺の墓前で自害して生命果てんとした。これを、時の住持登誉上人（大樹寺十三世）が押し止めてその軽率を諷められた。

戦国時代の乱世とて、武士がおのれの欲望のために戦う群雄割拠の時代で、日本の全土は穢れ、荒れ果て、国民は疲弊困憊の極であった。この穢土を厭い離れ、永遠の平和を希い、平和な国土を樹立し、天下の治平を希うことこそが仏のみ教えであり、安らかなお浄土を希い求めてこそと、念仏の精神を説き、ご先祖よりの伝承のお

念仏の心を心とすべしと諭されて、精神的に更生し、岡崎城に帰って、新体制を布いた。そして、「厭離穢土 欣求浄土」を旗印として、ついに天下を制覇、由來三百年の楽平の世たらしめたのである。

○そろそろ登れ 富士の山

ある日、檀家へお参りした時のことである。お仏壇でのご回向をすませてから、別室へ案内されてお茶を頂きつつ、その家の主人といろいろとお話しをしていたが、ふと床の間の一軸の軸にかけてあるのを見た。下の方には富士山と一疋の「かたつむり」と、そして上の方には「人世六十歳から、そろそろ登れ富士の山」と賛が書いてあった。何でもさる禅宗の管長さんから頂かれたのだそうだが、次の詩句からがなかなか人生の妙味を謳ってあると思った。

七十歳してお迎えの来た時は留守と云え
八十歳でお迎えの来る時は早すぎると云え
九十歳でお迎えの来る時はさように急ぐなと云え

百歳では時機を見てこちらからぼつぼつ行くと云え

まことに、なる程禪家のお坊さんらしい悟った境地と感じた。老人の高齢化の進む現代だから。

○相手の立場

秋も暮れて冬の日の近い日であった。寺の石段を降りたその時、一丁の「かまきり」が氣息奄々の体で、うずくまっていた。もしも誰かが上って来て踏めば可哀想だと、傍らの影に捨ててやろうと把み上げたが、相手は左にあらず、両方の鎌を振り立て、揮身の勇を振っての一生懸命の抵抗である。日ならずして死ぬべき者の素振りではなかった。一瞬怯むだが、私は助けようとの初一念で、思う通りに叢に放り出した。そして考えた。相手の立場ということ。

こちらにすればチョットしたことでも、相手にすれば一生懸命である。不用意な振舞い、不用意な言葉などは、チョットとしたことのつもりが、相手に取っては大きな問題、人の心が自分本意になればなる程、このチョット

した不用意が、他人を傷つけ、自分も傷つくことがある。相手の心を暗くするか、明るくするか、これが問題である。

○老人クラブ数え唄

〽一つ出ましたヨサホイノホイ

人と生まれた喜びを 無駄や粗まつにしちやならぬ

〽二つ出ましたヨサホイノホイ

不足いうまいお蔭さま 花も咲きます月も照る

〽三つ出ましたヨサホイノホイ

みんなに好かれて喜ばれ 楽しい茶の間の笑い声

〽四つ出ましたヨサホイノホイ

世渡りするには気は永く 心も丸く腹立てず

〽五つ出ましたヨサホイノホイ

いつも元気で皆笑顔 嫁も息子もまた孫も

.....

〽十と出ましたヨサホイノホイ

尊い生命じゃ大切に お前百までわしゃ九十九まで



念佛ひじり三國志

(三)

―法然をめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

鎌倉の汐風も十二月となれば冷気をふくむ。昨日の夕景なぞは沖に雪煙が舞ったほどだ。

熊谷二郎直実は二人の客を送って浜辺を歩いた。烈風をまともから浴びた。客たちがまとう黒衣の裾が千切れんばかりであった。

「やはり腰越までゆかれるか」

直実は念を押した。

「さよう。六時礼讃の修法があります。私らがゆかねば始まりませぬ」

安楽房は若い美形をくずさずに凛々しく答えた。つれ

の住蓮房は黙々と歩いている。

熊谷としては今宵、この念佛ひじりたちを邸に泊めたかった。まだ心底がととのっていないのである。夜を徹して語れば、左か右か、決断がつかうと言うものだ。

しかし安楽房たちはそんな直実の動揺を無視して腰越へ帰ろうとする。無視ではない。試めしているのだ。

人一倍、自我の強い熊谷直実だった。決断は自ら下すべきだ。はたからの強要や説得では、必ずどこかで心を逆転させると考えている。

「今宵は腰越で……」

「明日は伊豆山へ帰ります」

「走湯山へか」

「……」

安楽房は微笑をふくんだだけである。

未練がましく此処まで追ってくる直実の心がどちらを向いているか、十分に判っているのである。

この年、建久三年の三月、後白河法皇が破乱にみちた生涯を閉じた。法皇の側近にあった安楽房は法然を勧請して追善の法要を厳修した。在野の念仏ひじりたちをこの法要に集めた。

もちろん追善が主旨だが、安楽房はこれを機に専修念仏の教線拡大を意図した。銘々まちまちの念仏ひじりたちの結集をはかった。院における先輩である大和入道や一流の琵琶師生仏らを促して六時礼讃を弘布することも忘れなかった。

かねて盲目の生仏が大和入道見仏と八坂の引導寺で調声し、完成したこの音律声明が安楽房の精力的な動きで京の巷へひろがっていったのである。

京だけではない。安楽房は鎌倉に明るい住蓮房とはかり、関東の地へも持ちこんできた。

今宵、腰越の長者宅には十数人の男女が集ることになっていた。商人や漁夫のほか二、三の武士も来会するは

前号のあらすじ

天野四郎——河内の耳四郎は極悪非道の盗賊である。法然上人の禅室で過した一夜は耳四郎にとって心洗われる思いであった。自分のような極悪人でも阿弥陀仏は救いの手をさしのべて下さる。耳四郎は法然の言葉に従って、翌朝検非違使の庁へ自首して出た。洗いざらい己れの悪業を告白したが、今も昔も役所が一旦裁定を下した事件は蒸し返さぬものである。考えようによっては即座に死罪となるより、一生罪の意識を背負って生きていかねばならないことのほうが過酷であるとも言える。その後、贖罪の生活を送り熱病のうちに臨終を迎えた教阿弥陀仏こと耳四郎の後半生は、彼の業火を鎮める念仏の生活であった。

ずだった。出来得べくんば熊谷直実もつれてゆきたいところだが、彼は明朝鎌倉で重大な用務を持っている。それこそ一生の運命を左右するような重大事であった。

遠ざかりかけた安楽房は足をとめた。

直実は砂地にただずんで二人を見送っている。

烈風をかき分けるようにして言葉投げた。

「私らは西へ向ってまいります。貴公も西へ向う道をえらぶかどうか、明日おきめになりなされ」

「西へ向う道か」

熊谷も蜜声を張りあげている。

＜安楽・住蓮を見送る直実＞



「阿弥陀如来のいます西の国か、將軍の東の国かです」
それだけ言い捨てると、安楽房は再び足を急がせた。
熊谷は巨体を折るようになってしゃがみこんだ。思案が
重くて、立つてはおれぬらしい。

「来るな、あの男、間違いない」

熊谷邸を出てから全くものを言わなかった住蓮房の口
が初めて動いた。安楽房が仕掛けた「誘い」の効果を保
証するのであった。

「ああいう男には、まともから説得しても無駄だ」

安楽房にはこうした軽佻さがある。才気渾発、また信
仰も決して浅いわけではないが、誤解されるような口を
きく。

坂東武士、熊谷直実の単純な頭脳構造を嘲笑している
とさえ取られてしまう。

大外記、という学家に生を受け、法皇の寵愛を重くし、
ゆくところ佳ならざるはなかった安楽房遵西であった。
今や法然念仏を弘布する最先端におのれが立っている、
と過信するのも無理からぬことだったかも知れない。

熊谷直実が愚鈍な田舎武士に見えてならないとこの男
の魂ぐらいいは舌先の包丁ひとつで料理できる。

大慈大悲の阿弥陀仏がいます西方の道か。それとも將軍以下、官僚諸大名が權謀術策に奔命する東の幕府内に踏みとどまるべきか。

念仏ひじりたちと別れ、ひとり自邸へ戻る熊谷直実は身をよじりたいほどに懊悩するのであった。

鎌倉武士。

と、ひとことで片付けるには彼らの生きざまは余りにも複雑であった。その複雑さを、熊谷直実の半生が象徴していたかも知れない。

直実が熊谷郷の嫡子としてその所領を継いだのは十八歳（一説には二十一歳）の折であった。だが周囲の親戚は嫡子という名義を重んずるだけで、容易に知行の実権を直実に渡さなかった。ことに叔父の久下直光はことに嫌がらせの挙に出る。

平治の乱が源家の統領義朝によって画策される。馳せ参じなければ後でどんな仕返しを受けるかわからぬ。同族は直実に上洛を強要した。強要はするが、いざ出立の折、直実に提供した兵は三十騎そこそこであった。

平清盛との死闘。結果は惨敗で熊谷へ逃げ帰ってくる。直光以下の同族は知らんぷりだ。そればかりか、天

下を握った平氏が人質同然の「大番役」をふりあててくると、叔父の直光は代役として直実の上洛を強要する。平治の乱の前科がある。殺されるかも知れぬ再上洛であった。

「吾妻鏡」によると、武藏の同族たちが直実を「代役」として軽蔑したのに怒り、平知盛の部下になったとある。熊谷の短気を強調する記載だが、そうばかりではあるまい。平治の乱の前科が平家の「直臣」にならねば領地の保全が難しかったのであろう。

しかもこの留守中、叔父の久下直光はまんまと熊谷全郷を支配下に置いてしまう。

さらにまずいことは源家の嫡子頼朝の旗上げだ。平知盛以下の直実は討伐のため東下しなければならない。石橋山にこれを破った。

頼朝は三浦に逃げ、やがて千葉勢の加担を得て大軍で巻き返しをはかってきた。直光は日和見、直実は積極的に平氏側についた。熊谷郷は大恐慌である。

責任は嫡子である直実が取らねばならぬ。叔父はそう強要する。

頼朝の陣営へゆき、三拝九拜だ。

誠意を戦場で示せ、だ。

戦場の大功とは一番槍しかない。直実は常陸の佐竹攻めに従軍。見事一番槍、縦横無尽に戦場を駆けめぐる。

坂東第一の武者なり、と褒状は受けたが、それはすでに熊谷全郷を掌中にした叔父直光の身分を保証するだけだった。

さらに忘れもしない一ノ谷の合戦だ。

一一

平氏を追討するこの合戦でも熊谷直実は一軍の將たり得なかった。長子直家のほか数騎の郎党をつれただけの出陣だった。これは「先駆け」争いをした平山武者所季重も同じで、当時の武士団における彼らの位置が判然とするのである。

いわゆる鎌倉武士であって、鎌倉大名ではない。

戦場における熊谷らの目ざましい働きぶりを頼朝が称揚すると、

「なあに奴らは部下がいらないから、おのれ一身で戦わねばならんのよ。わしらはその分をちゃんと部下がやっている。なぜ將軍家は彼らだけに褒状を与えるのか」

露骨に皮肉を言う大名もいた。

裏面の政治工作で生きる大名と、現場の戦陣で遮二無二に戦う熊谷ら高級武士団。頼朝が包含する東国勢力の内容は複雑な因子で構成されているのであった。

とにかく一ノ谷合戦で、熊谷は何としても先駆けの武名をあげねばならない。それが彼の生命の糧であり、同時に生まれながらの本能でもあった。

これはいちおう総司令官の地位を与えられた九郎義経にしても同じであった。平家との合戦で、義経が各地において破天荒な武勲をあげたかげで彼がやはり「戦闘請負人」の立場にあったことを忘れてはならない。義経の地位もじつは武器を握った一個の職人であったわけだ。

その点、同じ頼朝の弟でも範頼は異なっている。諸大名に君臨する司令官で、彼は大軍を後方から指揮するだけで良かった。

だから範頼は軍令で後統部隊のない「先駆け」をきびしくいしめた。戦略的にも有害な行為であり、かつ本人がそこで死ねば犬死である。

勲賞アルマジ。

と「先駆け」を忌避した。

組織的な範頼軍団と、一騎当千の義経流の奇襲突撃隊とが奇妙に噛み合つて、平氏の軍勢に応接のいとまを与えなかったのが一ノ谷から壇ノ浦までの追撃戦と言えるであらう。

さて、寿永三年二月七日の寅ノ刻、熊谷直実は、海浜を埋める範頼軍団の陣を駆け抜け、一ノ谷の城壁へ取りついた。あとを追うように平山季重も来着した。

背後に控える五万六千騎の大軍団を無視して一子直家ともども城壁を乗り越えた。平山も遅れじと城内へ駆けこむ。

どちらが一番乗りだったか。言い争っているうちに彼らはたちまち城内の兵に取りかこまれた。わずか五騎の突撃である。

激しい格闘。わが直家も傷ついた。そのころ範頼軍団の先鋒も城壁下へ取りついたので、平氏の指揮官は少数の熊谷らを前庭へ放置したまま城門を固く閉ざし、城壁から矢ぶすまで押し寄せた範頼軍団に応戦した。

まさしく熊谷らは最前線に取り残された「孤児」にひとしくなった。

一ノ谷の城内に大混乱が発生したのはその直後であ

る。源家の別働隊が思わぬ方角から攻めこんできたのである。

城の背後を扼する峻嶮のヒヨドリ越えを、義経の奇襲部隊が逆落しに駆けおり、城内へ乱入したのだ。その勢はわずか七十余騎だったが、予期もしない死角からの奇襲は数万の大軍にも見える。

大混乱の平家軍は先を争って城外へ遁走をはかった。

彼らを弱腰にさせた理由として、安全な逃げ場所があったことだ。沖に軍船が並んでいる。そこへ逃げこみさえすれば四国の屋島まで安全なコースが約束されている。

城外に逃げ出す平家軍を、範頼軍団は包囲誅戮した。大将首級九、千余騎が撃たれた。

まごついたのは熊谷直実である。うっかり逃亡する平家軍にまじりこめば味方に殺されかねない。完全に逃亡の汐が城外へ引き去ってしまうのを待たねばならなかった。

やっと城外へ出て、目ぼしい相手をと物色したが、討たれる者はすでに撃たれ、逃げのびた者は沖の軍船である。海浜に人影はない。

わずかに直実の眼を射たものがあつた。海面に浮かぶ

若武者のうしろ姿だ。馬を泳がせて軍船にたどりつこうとする。

「あれは大將軍とこそ見参らせ候え。まさなうも敵にうしろを見せさせ給うものかな。返さえ給え」

と大音声で呼び返した。

一瞬ふり向いて思案した平家の公達。ゆっくりと馬首を立てなおすと砂浜の方へ引き返してきた。

兜のうちにのぞく顔は未だ若い。傷ついたわが子直家と同じ年輩であらうか。

名乗ってくれたら一命は助命すべく取りはかろう、と直実は提案した。若い公達は笑って、

「汝がためには良い敵ぞ。名乗らずとも首を取って人に問え。見知らふずるぞ」

さわやかに答えるのであった。

もう一度、海中へ逃がしてしまおう、と直実は思った。余りにもいたいたいしい公達の態度ではないか。

だが、そのとき背後で近づく味方の馬蹄がひびいた。

「疾く首をはねよ」

少年は砂浜に坐りこんで兜を脱ぎはじめた。直実はこれまで、とその白い首すじに太刀をあてた。

首を包むために公達の小袖を引き千切ろうとしたら、腰に差した錦の袋入れを発見した。中味は横笛であった。戦場に笛を携行する若き公達。熊谷ら坂東の荒武者には想像もつかぬ振舞いであつた。もの哀しい想いが直実の心をしめつけた。

公達は平相国（清盛）の弟経盛の一子敦盛であつた。直実の子直家と同じ十七歳であることを、あとで知つた。

戦場で戦う武士の悲哀を、直実は骨の髄で知つた。こんなにしてまで人間同士が殺し合ねばならぬのか。そして、殺し合つた結果が、どんな代償を与えられるのであらうか。

戦後――

熊谷直実ほどこの言葉の重味を実感した者もないはずである。

一身をなげうって敵と取っ組み合う機会はなくなつてしまつた。おのれの領地を管理し、家子郎党を養つてゆかねばならない。

元来、直実には苦が手な仕事のうえに、叔父の久下直光はそれが天命と信ずるかにように、休みなく直実領へ犯をくりかえすのである。

＜敦盛を斬った直実＞



一生懸命は一処懸命がほんとうだと言われる。そもそもが農民から出発した東国の武士には飽くことを知らぬ土地への執念があった。一カ処でも自有地を拡張したいのである。

会って話せばきわめてものわかりの良い叔父直光だったが、やることは手のひらを返すように背徳虚言をほしいままにする。

叔父との醜い土地抗争で明け暮れる直実の社会的背景も決して愉快なものではなかった。「戦後」はすでに戦争職人が必要としなくなっていた。將軍以下、幕府の直実たちへの処遇は冷やややかであった。戦功の自慢話に耳を傾けてくれたのも当座のことで、鎌倉へ来ても自分だけが周囲から浮き上がっている事実を自覚しないわけにはいかぬ。

鬱々として楽しまない直実、それが暴発する事件がおこった。文治三年夏、鶴岡八幡宮での流鏑馬(やぶさめ)であった。

三

八月四日、鶴岡八幡宮では放生会の始行にあたり、境

内を浄化する目的で流鏑馬の行事が厳修されることになった。

熊谷直実を怒らせたのは、その配役だった。彼には「的立て」の役がふりあてられた。

流鏑馬は皇居で端午の節会におこなわれる騎射の行事である。武徳殿前で近衛と兵衛の官人たちによって馬上からの騎射する。馬を駆けさせ、颯爽と大弓を放つ射手。鎌倉では宮中のこの行儀を即座に取り入れ、端午の節会に限らず何の行事にも場内浄化を名目として実施したものである。

颯爽と馬上からの騎射……ところが「的立て」は馬にも乗らず、地上に立ったまま射手たちが射る「的」を管理する役柄である。戦場で馬を駆け、剛弓を引いてきた直実には納得のゆかぬ配役である。さっそく行知事となつた梶原平三景時のもとへ文句をつけにいった。

平三景時もともに戦場を駆けめぐつた鎌倉武士である。ひとことで意は通じると思ったが、

「熊谷、無学なことを申すな」

と逆に説得にかかるのであった。

梶原の言い分によると、皇居の流鏑馬で射手はしがない

い北面の武士たちの役目、的立てこそは高貴な近衛の官人たちがつとめる仕事だと言うのである。

「熊谷、お前はもう一介の戦場の勇者ではないのだぞ。

武衛公直属のだいいな官人なのだ。だからこそ今度の流鏑馬でも的立ての役をつとめてもらうことになったのだ」

「田舎大名の小僧奴らが馬上で駆けて、このわしが立ちん捧なぞ、そんなことが出来ると思うか」

直実は額に青筋を立てて自説を撤回しようとはしない。

「いつまでたつてもおぬしは無学者よのう」

すでに戦場を忘れ、頼朝側近の官僚にぬくぬくおさまりこんだ梶原平三景時が小面憎くてならない。

「ええわ。わしは故郷へ帰る」

席を蹴立てて直実は熊谷へ引揚げてしまった。

梶原との口論だけで終っていたら直実も深く根には持たなかったであろう。

その後しばらくして鎌倉から沙汰があった。命令不服従の咎で所領の一部を没収だ。梶原景時と叔父久下直光との接近を伝聞するにつけ、直実の心中はおだやかでは

なかった。

だが、ここで誤解してはならない。直実は後年、法然門下の有力な念仏ひじりとなるが、出家の動機をこの不平不満にすべて帰納させてしまうのは誤まりである。短絡的な現代人のカンぐりにひとしい。

熊谷直実も鎌倉武士だ。不平不満が原因のすべてであったなら、彼は梶原景時を斬るなり、叔父の直光と堂々一戦を交じえたであらう。

世をはかなむ材料の一部にはなり得ても主因ではない。

鬱々たる直実は鎌倉へは出仕せず、熊谷の郷へひきこもっていた。

そんなある日、直実は思い立って旅へ出た。箱根から伊豆へ巡拝して歩いたのである。

箱根権現。三島大社。それと走湯山。

いずれも將軍頼朝が篤く信仰した地で、毎年欠かさずに妻の政子をともなつて巡拝している。

箱根、三島をめぐり、直実は走湯山へやってきた。山中の堂塔を巡拝することもだが、直実は専光坊の良暹にひと目会っておきたかった。

良暹は高德な天台僧で頼朝の信任も篤かった。先年の文治元年にも京都から父義朝の遺骨が届くと、頼朝はすぐに良暹を鎌倉へ招き、南御堂へ埋葬供養のすべてを依頼している。学識も豊かな僧で、生きる方途を見失いかけた直実は教示を得たかったのである。

走湯山。

当時この山中には天台密教の堂塔が建ち並び、多くの衆徒が修法に励んでいた。さながら坂東の比叡山の觀を呈した。

「吾妻鏡」にもしばしば登場してくる地名だ。現在の熱海市に属する伊豆山である。

頼朝が旗上げして一敗地にまみれた石橋山もこの付近で、峻嶒ではないが折りなした層深い山塊が頼朝の逃亡を助けた。源家再興を成就させた靈地として頼朝はだいに扱っている。

「吾妻鏡」、治承四年十月十八日の記載によると、

今日伊豆ノ専当、衆徒ノ状ヲ捧ゲテ路次ニ馳セ参ズ。兵革ノ間、軍兵等、当山結界ノ地ヲ以テ往反一路トナスノ間狼藉断絶スベカラザルカ。コレヲ

如何ニセント云々。ヨツテ諸人ノ濫吹ヲ停止スベ
キノ旨、御書ヲ下シテ宥メ仰セラル。ソノ状ニ曰ク
謹ミテ請クル、走湯山大衆解状ノ旨、早クカノ山
ノ狼藉等ヲ停止セシメ、御祈禱ノ次第ヲ喜悅セシ
ムベキコト。

治承四年の「兵革」とは頼朝が二十万の大軍を率いて、平家と黄瀬川に対陣した折をさす。相模土肥の兵士たちは走湯山を越えて東山道へ集結していったと思われる。相模土肥は現在の早川付近らしく、兵士たちは走湯山中の堂宇を宿舎として、飲酒高声の狼藉を働いたようである。

頼朝は、今後の進撃にかかわる重大な不祥事として嚴重に結果へ軍兵が立ち入ることを禁止した。

さて熊谷直実は専光房の庵室で良暹と対面した。堰を切ったようにおのれの無常觀を流露させた。

一ノ谷の合戦で若き公達平敦盛の首を掻いた痛烈な体験には多くの言葉を費やした。

「何もかも捨てて、出家の道へはいりたい。そしてわし
が戦場で手をかけた人々の菩提を弔うことに余生をつく

したい」

じつと直実の言葉を聞いていた良暹だが、突然大声で罵りはじめた。

「そなたは音に聞こえた荒武者、戦場の勇者ではないか。平家を滅したとて天下は未だやわらいだわけではない。鎌倉武衛公はこれからも幾多の敵を摺伏しなければならぬ。その片腕ともなるそなたが、女人のようにうじうじ申すとは何ごとか。余計なことは考えずに、とっと鎌倉へ帰って忠勤を励みなさい」

良暹としては、こう大喝を喰らわせるほかにはなかったであろう。頼朝の篤い被護を受けている以上、麾下の武将の訓育には一役を買って出なければならぬ。無常觀なぞは敗戦思想もおびたらしい。武士の志気を挫く以外の何ものでもなかった。

「やはりそうか」

直実の頭脳は単純で無垢である。良暹の大喝を素直に受け止めた。

わしは武士の自分を忘れていた。

湿度の高い雨雲が、心から晴れた。何ものにも屈せず
に、鎌倉武士で生きぬかねばならない。新鮮な勇氣も湧

いた。

専光房をさらに登って、奥之院まで詣でることにした。

峻嶒な山路が、しばしば細い溪流をまたぐ。どの溪流からも湯煙が立ちのぼっていた。全山が巨大な湯泉を含み有していたのである。走湯山の名の由来もそこにあるのであろう。

奥之院に近く、木の香もまだ新しい小ぶりの堂があった。その前に黒衣の僧がひとり立っていた。

「このお堂は？」

熊谷は声をかけた。

「常行堂——」

「どんな仏を祀るのかね」

「ご本尊はありません。念仏するところです」

「本尊もないのか。念仏とは何だ」

「念仏は念仏です」

聞く方もだが、答える方もぶっきら棒だった。

しかしその朴実さが直実の体質に合った。いつのまにか堂内へあがりこんで念仏について聞法しはじめていた。

聞法と言ってもこのひじり、途切れ途切れにしか語らない。そこがいつそう直実の心をひきつける。深いものがあるらしく思える。

粥を馳走してくれた。夜もふけた。どちらも間伸びのした会話を続けている。

「湯にはいりませんか」

ひじりは言った。八月でも山中の深夜は冷える。常行堂の裏手に溪流が走る。それが熱湯なのだ。ひじりは先に立って熱湯へ身を沈めた。直実も我慢した。

「捨ててこそ、ですね」

ぼつりと言う。

「捨ててこそ……」

「念仏とは、何もかもを捨ててしまうことです」

「何もかもを、か」

直実は反芻してみるだけだった。

でも、判るような気がする。念仏はともかく、現在の自分は何もかも捨ててしまわなければいけないようである。

これが熊谷直実と、住蓮房との出会いであった。

(つづく)

二 編集後記 二

○時は実りの秋、まさに秋の山は紅葉の織りなす錦の絵模様である。定めなく、高く軽やかな秋の雲のはるかに遠き世界を背景に、秋の山はまことに色あざやかに照りはえてゐる。しかし、秋思に愁いの影をひそめてふともの想えば、

更け行く秋の夜 旅の空の

わびしき思いに ひとりなやむ

恋しやふるさと なつかし父母

夢路にたどるは 故郷の家路

〔旅愁〕より

というような一節が想い起され、私は、ただむしうに哀切な気持ちに陥つてしまふ。それは、秋晴れのさわやかな秋天の高さに比しても、また秋の野山の澄みきった大気に触れても、私の想いのなんと湿りがちなことか。かつて若山牧水は、

いざゆかむ行きてまだ見ぬ山を見む

このさびしさに君は耐うるや

という歌で問うたが、はたしてこの私には結実の秋に寄せる解答を結べそうにない。

秋山の上の遠山移るなり

草田男

山の夜は星のみ秋思一途なる

羅生

○『秋風秋雨人を愁殺す』と題したのは武田泰淳であったが、この十月五日は、その泰淳の一周忌に相当する。武田泰淳は、浄土宗の僧職にも身を置いた人で、ことに弊会の創設者真野正順博士をはじめとして、歴々の同人諸氏との交誼も篤く、生前より本誌との関わりも甚だ深かったのである。折しも、文芸諸雑誌においても泰淳忌に寄せて二、三の特集記事が編まれており、本誌にあつても、武田泰淳文学の一層なる顕彰を期して、関わり深い方々の玉稿を賜わつていささかとも誌面を埋めたのである。○『浄土』誌は会員諸兄の暖かいご高配を得て、浄土の教えを確かめ合い、深め合いながら、念仏の精進をすすめて行く雑誌である。ひとりでも多くの人に読んでいただければ幸いである。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十三巻 十月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十二年九月二十五日 印刷
昭和五十二年十月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷人 関二三男
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

昭和十年五月二十日（第三郵便物認可）毎月一回一日発行
昭和五十二年九月二十五日印刷 昭和五十二年十月一日発行

第四十三卷

第十号

＝好評発売中＝

大正大学教授 竹中信常著

『タ ブ ー の 研 究』

—文部省科学研究費助成出版—

A 5 判 450頁 定価 8,500 円

◎宗教学界の権威である著者が、新しい角度からタブー理論を集大成され、さらに数々の身近な事例を踏まえて体系的にまとめられた大書である。皆様のご購読を是非おすすめしたい。

発 行 山喜房仏書林

東京・本郷・東大赤門前
電 話 (03) 811-5361

『和訳善導大師観經四帖疏』 村瀬秀雄訳著

B 6 判 584頁 上製函入 定価 3,500 円

『和 訳 浄 土 三 部 經』 村瀬秀雄訳著

B 6 判 474頁 上製函入 定価 2,500 円

檀信徒への記念品、贈呈用に是非ご利用下さい。
万人必読の和文聖典です。

檀信徒心得・訓読・註解つき

『浄土宗檀信徒のおつとめ』

折本68頁 定価190円（100部以上一割引）

折本80頁 <小消息つき>定価220円（100部以上一割引）

取扱い 法然上人鑽仰会

〒 102

東京都千代田区飯田橋1-11-6
振 替（東京）8-82187